

研 究

乳幼児とのふれ合い体験事業による
小学生の短期的な効果

岩本 里織¹⁾, 藤井ひろみ²⁾, 成瀬 和子³⁾, 柴田しおり⁴⁾, 奥山 葉子²⁾
都筑 千景⁵⁾, 山下 正⁵⁾, 波田 弥生⁵⁾, 有本 梨花²⁾

〔論文要旨〕

目 的：児童が乳幼児とのふれ合い体験を経験したことによる、いのちの大切さに関する意識の変化を明らかにすることを目的とする。

方 法：対象者はA市の乳幼児とのふれ合い体験事業を経験した小学5、6年生の児童、調査期間は2011年7月～2012年2月。調査方法は、児童への無記名自記式調査を、乳幼児とのふれ合い体験事業の実施前後に実施した。

結 果：回収率は、事業前調査93.1%、実施後調査99.7%であった。乳幼児とのふれ合い体験前後では、いのちの大切さに関する19項目のうち6項目が否定的な意識から肯定的な意識へ有意に変化していた。

結 論：乳幼児のふれ合い体験は、児童にとって小さい子どもの大切さや育児に関する肯定的意識が高まる機会となっていた。

Key words：乳幼児ふれ合い体験、次世代育成事業、小学生、事業評価

I. 諸 言

わが国において、平成23年度から出生数が減少を続け¹⁾少子化社会が進行しており、子ども同士のふれ合う機会が減少していることが考えられる。原田は、自身が親になる前に小さい子どもを抱いたり遊ばせたりした経験がない母親が4名に1名以上の割合であることを報告しており、そのことが現代の親の子育ての困難さに影響を与えていると述べている²⁾。現代の親世代は少子化社会で育ち、自身が親になる前に子どもと接した経験が乏しいという背景が、親になっても子どもへの接し方がわからず、育児ストレスを増大させる一因であることが考えられる。このような少子化社会が進行する中、子どもたちが、幼い子どもとふれ合

う経験をもち、幼い子どもたちの存在の大切さを学び、自分や小さい子どものいのちの大切さをも感じる機会をもつことが重要である。

少子化社会において、小学生・中学生・高校生および大学生などの青年期が幼い子どもと接する機会をもてるよう、乳幼児とのふれ合い体験（以下、ふれ合い体験）が多様な方法で実施されている³⁻⁵⁾。その効果について検証したのを見ると、大学生などの青年期を対象としたふれ合い体験の効果については、宮谷ら⁶⁾が体験者の赤ちゃんに対するイメージが明るく、にぎやかで、強く、のびのびなどの方向に変化がみられることを明らかにしている。また、倉繁ら⁸⁾は、ふれ合い体験をした青年期の男女は子どもが好きであること、男性の育児についての自信が高まったこと、

The Short-term Effect on the Schoolchild by Experience Interchanging with Infants

[2781]

Saori IWAMOTO, Hiromi FUJII, Kazuko NARUSE, Shiori SHIBATA, Yoko OKUYAMA,
Chikage TUZUKI, Tadashi YAMASHITA, Yayoi HADA, Rika ARIMOTO

受付 15.10.2

採用 16.11.16

1) 徳島大学大学院医歯薬学研究部（保健師）

2) 神戸市看護大学（助産師）

3) 東京医科大学医学部看護学科（保健師）

4) 神戸市看護大学（看護師）

5) 神戸市看護大学（保健師）

佐々木ら⁹⁾はふれ合い体験が参加者の心理・生理・内分泌学的な側面において母性機能に肯定的変化を与えることを明らかにしている。高校生を対象にしたふれ合い体験は、参加者の親準備性の獲得につながっている可能性があること¹¹⁾や、自己のライフプランや妊娠・出産・育児への肯定的意識への変化¹²⁾などが明らかにされている。中学生を対象としたふれ合い体験の効果については、子育てに対するイメージに肯定的な影響を与えることが明らかにされている^{3,10)}。このように、中学生から大学生におけるふれ合い体験の効果については、一定の効果があることが明らかにされている。

一方、小学生を対象としたふれ合い体験については、片山ら¹³⁾はふれ合い体験直後に小学生の赤ちゃんへのイメージが肯定的に変化していることを報告しているが、対象人数が30名と少なく統計的な検証がなされていない。寺村ら¹⁴⁾はふれ合い体験6か月前と体験1週間後の比較により小学生の、親や家族に対するイメージ、自分が親になることに対するイメージ等の変化について検討しているが十分な効果を示すことができていない。このように小学生に対するふれ合い体験の効果については、既存研究においては十分に検証されていない現状がある。したがって、小学生における乳幼児のふれ合い体験の効果を検証することは重要である。

著者らが実施協力するふれ合い体験事業においても、事業関係者は、ふれ合い体験をした小学生に、自分より小さな子どもを大切に思う感情の芽生えや、自分や友だちのいのちの大切さや親に対する感謝などの意識が高まるなどの変化を感じていた。さらに、ふれ合い体験を実施する学年による児童の反応の違いや、男女によるふれ合い体験に対する関心の違いがあるのではないかと感じていた。しかし、このようなふれ合い体験の効果や学年や性別による効果の違いは検証されていない。

そこで、本研究では、乳幼児とのふれ合い体験を経験した小学生を対象に、小さい子どものいのちの大切さや自分や友だちのいのちの大切さなどに関する意識の変化、学年や性別および小さい子どもと接した経験の有無による効果の違いを明らかにすることを目的とする。

II. 研究方法

1. 対象

対象施設は、A市B区において小学生と乳幼児と

のふれ合い体験（事業名：「いのちの感動体験」事業）を実施している小学校であり、対象者は、対象施設において小学生と乳幼児とのふれ合い体験を経験した小学5年生または6年生である。

2. 調査期間

調査期間は、2011年7月～2012年2月である。

3. 調査方法

A市B区内において「いのちの感動体験」事業（以下、事業）を実施している小学校のうち、調査期間に事業が実施される小学校の校長へ本調査の協力を依頼した。小学校校長による協力の同意が得られた4校へ、児童への無記名による自記式質問紙調査を行った。質問紙調査は、事業実施前後（以下、事業前調査、事業後調査）に、教室にて担任教員から小学生の児童（以下、児童）へ配布し、回答を得た。なお、事業前調査は事業実施の約1週間前に実施し、配布347名、回収323名（回収率93.1%）であった。事業後調査は事業直後に行った。事業参加者は、5年生114名（男子53名、女子61名）、6年生230名（男子118名、女子112名）、合計344名であり、全員に調査用紙を配付し、回収343名（回収率99.7%）であった。

4. 調査内容

調査内容は、①児童の属性、②事業での経験の内容、③独自に作成した「いのちの大切さ」に関する19項目、④事業の感想に関する質問4項目である。

「いのちの大切さ」に関する項目は、先行研究¹⁵⁾からふれ合い体験の効果を示すものを抽出するとともに、事業に関わってきた研究者や事業担当保健師らと、事業のねらいや児童に期待する効果について出し合い統合し、検討を繰り返して作成した。さらに作成した項目について、小学5、6年生の児童が質問内容を的確に理解し回答が可能であるかを検討するために、小学校教諭および養護教諭から意見を求め、文言を修正した。最終的に19項目を精選した。回答は「大変そう思う」、「そう思う」、「そう思わない」、「全くそう思わない」の4択とした。項目は【小さい子どもや育児に関する意識】12項目（項目①～⑫）、【自分や友だちや家族の大切さに関する意識】7項目（項目⑬～⑲）とした。なお項目⑤「お母さんたち…」、項目⑥「お父さんたち…」と一般的なお父さんやお母さんというも

のをイメージした表現を使用した。これは、父母不在の児童への配慮によるものである。また、事業の感想に関する項目は、「赤ちゃんとお過ごすのを楽しみにしていたか」、「赤ちゃんとお遊ぶのは楽しかったか」、「もう一度参加したいと思うか」、「ふれ合い体験で経験した内容」について選択項目を設けて回答を得た。

5. 分析方法

児童の属性は、度数分布を算出した。独自に作成した「いのちの大切さ」に関する19項目については、「大変そう思う」、「そう思う」を「そう思う」群と肯定的意識をもつ群(③⑫は逆転項目)とし、「そう思わない」、「全くそう思わない」は「思わない」群と否定的意識をもつ群(③⑫は逆転項目)とし、事業前後および男女、学年、過去に赤ちゃんに触れた経験の有無について、事業前後を χ^2 検定を用いて比較し、有意確率0.05未満を有意差ありとした。分析は、SPSS Statistics 18を用いた。

6. 児童と乳幼児のふれ合い体験事業「いのちの感動体験」事業の概要(表1)

A市で実施している児童と乳幼児とその親のふれ合い体験事業は、A市B区における保健センター、小学校、地域の民生児童委員会、C大学等が協力して実施している。事業は、小学校もしくは小学校と隣接した児童館で実施され、児童と小学校区に住む地域の乳幼児(概ね3か月～3歳)とその親が交流するものである。交流を促進するファシリテーターとして、地域の民生児童委員やボランティアなどの協力を得ている。内容は、児童が乳幼児とおもちゃや絵本などを介して一緒に遊んだり、乳幼児を抱っこしたり、乳幼児の親に出産の時の様子や育児の状況を聞くなどである。交流時間は概ね40分ほどである。

小学校における性教育の実施状況は、事前に助産師によるいのちの始まりの講義と抱っこの練習をしている小学校が2校であり、残り2校は事業に関連する性教育は実施していなかった。

7. 倫理的配慮

小学校校長へ、研究の主旨を文書および口頭で説明するとともに調査協力は任意であることを説明し、協力を依頼した。さらに児童へは、担任教員から書面もしくは口頭で調査の目的、調査は無記名で調査協力は

表1 児童と乳幼児とのふれ合い体験事業の概要

1. スタッフ:A市保健師, 地区民生児童委員, A大学教員, 児童館職員, 地域ボランティア, 小学校PTAなど
2. 場所: 小学校もしくは小学校に隣接する児童館
3. 対象学年: 5年生もしくは6年生
4. 乳幼児の年齢と参加数: 3か月から概ね3歳, 参加人数は13~23組
5. 事業の流れ
9:30~ スタッフ打ち合わせ, 会場設営
9:30~ 乳幼児と保護者の受付
10:50~ 児童が入室し, 乳幼児と保護者とのふれ合い交流開始
・児童5, 6人が男女共同グループとなり, 1グループに2~3名の乳幼児とその保護者, ファシリテーターが参加する。各グループの乳幼児の年齢は可能な限りで多様な年齢とする。
・保育士等による手遊び歌を行い, 乳幼児と児童と一緒に手遊び歌を行う。
・児童と乳幼児とその保護者とのふれ合いを行う。民生児童委員やボランティア等がファシリテーターとして入る。
・自由にふれ合う。児童と乳幼児とのふれ合いができるように, ファシリテーターが, 仲介し, お互いの自己紹介や, 児童からの質問などを促す。ファシリテーターは, 児童と乳幼児が, お絵かきをしたり, おもちゃ等でいっしょに遊んだり, 握手や抱っこをするなどを働きかけている。
11:30~ ふれ合い終了
・児童から乳幼児と保護者へのお礼の挨拶や歌のプレゼント
・終わりのあいさつ(小学校の校長先生等)
終了後 教室
・児童による参加した乳幼児とその保護者へのお礼のお手紙の記載
・本調査用紙記載

自由意思によるものであり、協力しない場合は無記入で提出することなどを説明し、調査用紙を配布した。なお、研究者から担任教員へは、児童への調査協力を強要せず、自由意思によるものとする等々を説明した。本研究は神戸市看護大学倫理委員会の承認を得て実施した(承認年月日2011年6月14日)。

III. 研究結果

1. 対象児童の背景(表2)

1) 回答者の家族構成

事前調査の結果から、児童の家族構成は、弟・妹がいる者が163名(50.4%)であった。祖父・祖母や叔父・叔母と同居する大家族が38名(11.8%)であった。母子・父子家庭、両親不在の家庭は25名(7.7%)であった。

2) 児童の経験

事業以外で「赤ちゃんに触れた経験」がある者は、事業前調査262名(81.1%)であり、「自分の出生時

表2 対象者の属性

		実施前 (N=323)		実施後 (N=343)	
		人数	%	人数	%
学年と性別					
5年生	男子	43	(13.3)	53	(15.5)
	女子	48	(14.9)	61	(17.8)
	不明	1	(0.3)	0	(0.0)
	小計	92	(28.5)	114	(33.2)
6年生	男子	115	(35.6)	117	(34.1)
	女子	114	(35.3)	112	(32.7)
	不明	2	(0.6)	0	(0.0)
	小計	231	(71.5)	229	(66.8)
合計	男子	158	(48.9)	170	(49.6)
	女子	162	(50.2)	173	(50.4)
	不明	3	(0.9)	0	(0.0)
家族構成					
	弟・妹がいる	163	(50.4)	167	(46.7)
	拡大家族	38	(11.8)	47	(13.7)
	その他母子家庭等	25	(7.7)	30	(8.7)
赤ちゃんに触れた経験					
	あり	262	(81.1)	279	(81.3)
	なし	30	(9.3)	34	(9.9)
	わからない	29	(9.0)	30	(8.7)
	無回答	2	(0.6)	0	(0.0)
自分の出生時の話を聞いた経験					
	あり	282	(87.3)	301	(87.8)
	なし	12	(3.7)	13	(3.8)
	わからない	26	(8.1)	29	(8.5)
	無回答	3	(0.9)	0	(0.0)

の話を聞いた経験」がある者は、事業前調査282名(87.3%)であった。

2. 児童の事業後の感想(表3)

事業を「楽しみにしていた」と回答した者は303名(88.3%)であり、「赤ちゃんと遊ぶのは楽しかった」301名(87.8%)、「もう一度参加してみたい」303名(88.3%)という回答があった。

事業において、児童が経験した内容は、「いっしょに遊んだ」327名(95.3%)が最も多く、次いで「さわったり、握手をした」313名(91.3%)であった。また児童の7割以上が、乳幼児に「話しかけた」、「抱っこした」という経験をしていた。「お母さんの話を聞いた」は199名(58.0%)であった。

3. 児童のいのちの大切さに関する意識の現状

乳幼児との交流をする前の、児童のいのちの大切さの意識の現状を検討した。「いのちの大切さ」に関する項目について、「大変そう思う」、「そう思う」という肯定的意識をもつ者が多い項目は順に、⑰「いのち

は、大切なものだと思う」320名(99.1%)、⑲「私を産んでくれたお父さん、お母さんをありがたいと思う」317名(98.1%)、⑮「私は友だちを大切に思う」313名(96.9%)、⑤「お母さんたちは赤ちゃんや小さい子を大切にしている」312名(96.6%)、⑥「お父さんたちは赤ちゃんや小さい子を大切にしている」310名(96.0%)であった。

また、「そう思わない」、「全くそう思わない」という否定的意識をもつ者が多い項目は、順に、⑪「赤ちゃんや小さい子どもを育てるのは楽しそうだ」66名(20.4%)、⑩「私は将来、赤ちゃんがほしい」51名(15.8%)、④「私は赤ちゃんや小さい子といっしょにいると楽しい」30名(9.3%)、⑯「私は友だちに大切にされている」28名(8.7%)、⑧「私は赤ちゃんや小さい子のことが好きだ」28名(8.7%)であった。

4. 事業前後における児童の意識の変化

1) いのちの大切さに関する意識の変化(表4)

事業前後において、「いのちの大切さ」に関する19項目について意識の変化を比較した。その結果、【小

表3 「いのちの感動体験」事業参加後の感想

		N=343	
項目		人数	(%)
赤ちゃんと過ごすのを楽しみにしていたか	はい	303	(88.3)
	いいえ	1	(0.3)
	どちらでもない	39	(11.4)
赤ちゃんと遊ぶのは楽しかったか	楽しかった	301	(87.8)
	少し楽しかった	35	(10.2)
	あまり楽しくなかった	5	(1.5)
	楽しくなかった	2	(0.6)
	無回答	2	(0.6)
もう一度参加したいと思うか	参加したい	303	(88.3)
	参加したくない	4	(1.2)
	わからない	34	(9.9)
	無回答	2	(0.6)
ふれ合い体験で経験した内容 (複数回答)	いっしょに遊んだ	327	(95.3)
	さわったり, 握手をした	313	(91.3)
	話しかけた	253	(73.8)
	抱っこした	246	(71.7)
	お母さんの話を聞いた	199	(58.0)
	あやした	157	(45.8)
	あまり関われなかった	16	(4.7)
	その他	45	(13.1)

さい子どもや育児に関する意識】について、事業前後で否定的意識から肯定的意識へと有意に変化した項目は、④私は赤ちゃんと小さい子といっしょにいると楽しい、⑦大人たちは子どもたちを大切にしている、⑧私は赤ちゃんと小さい子のことが好きだ、⑨みんなは赤ちゃんと小さい子のことが好きだ、⑩私は将来、赤ちゃんがほしい、⑪赤ちゃんと小さい子を育てるのは楽しそうだ、であった。

逆転項目として設定した、③私は赤ちゃんと小さい子どもがこわい、⑫赤ちゃんと小さい子を育てるのはたいへんそうだ、については、事業前後での変化はみられなかった。

【自分や友だちや家族の大切さに関する意識】について、事業前から事業後に否定的意識から肯定的意識へ変化した者に有意差があった項目はなかった。

2) 事業前後の変化と児童の背景との関係 (表5)

(1) 実施学年 (5年生, 6年生) による効果の違い (表5)

事業実施学年は5年生と6年生であり、学年毎の事業前後の「いのちの大切さ」に関する意識の変化の差を検討した。事業前から事業後に否定的意識をもつ者が有意に減少している項目は、5年生で、④赤ちゃんと小さい子といっしょにいると楽しい、⑩将来、赤ちゃんがほしい、であった。有意差はみられないが減少傾

向があるものは、⑪赤ちゃんと小さい子を育てるのは楽しそうだ、であった ($p < 0.1$)。6年生において否定的意識をもつ者が有意に減少している項目は、④赤ちゃんと小さい子といっしょにいると楽しい、⑦大人たちは子どもたちを大切にしている、⑧私は赤ちゃんと小さい子のことが好きだ、⑨みんなは赤ちゃんと小さい子のことが好きだ、⑪赤ちゃんと小さい子を育てるのは楽しそうだ、であった。6年生の方が5年生より、有意に変化した項目が多かった。

(2) 性別による意識の違い (表5)

性別による事業前後の否定的意識をもつ者の変化を検討した。事業前後の「いのちの大切さ」に関する項目について、否定的意識をもつ者が有意に減少している項目は、男子で、②赤ちゃんと小さい子どもは大切だ、④赤ちゃんと小さい子といっしょにいると楽しい、⑧赤ちゃんと小さい子のことが好きだ、⑨みんなは赤ちゃんと小さい子のことが好きだ、⑩将来、赤ちゃんがほしい、⑪赤ちゃんと小さい子を育てるのは楽しそうだ、であった。女子には、否定的意識をもつ者が有意に変化している項目がなかった。

(3) 赤ちゃんと触れた経験の有無 (表5)

赤ちゃんと触れた経験がある者となない・わからない者について、事業前後で否定的意識をもつ者の変化を

表4 「いのちの感動体験」事業前後の「いのちの大切さ」に関する変化

	事業前 (N=323)				事業後 (N=343)				χ^2 値	p 値*
	「たいへんそう思う」, 「そう思う」の合計		「そう思わない」, 「まったくそう思わない」の合計		「たいへんそう思う」, 「そう思う」の合計		「そう思わない」, 「まったくそう思わない」の合計			
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)		
【小さい子どもや育児に関する意識】										
①私は赤ちゃんや小さい子どもをかわいく思う	314	(97.2)	8	(2.5)	335	(97.7)	5	(1.5)	0.88	0.347
②私は赤ちゃんや小さい子どもは大切だ	309	(95.7)	10	(3.1)	333	(97.1)	5	(1.5)	2.02	0.156
③私は赤ちゃんや小さい子どもがこわい	9	(2.8)	313	(96.9)	14	(4.1)	324	(94.5)	0.89	0.346
④私は赤ちゃんや小さい子といっしょにいると楽しい	292	(90.4)	30	(9.3)	331	(96.5)	8	(2.3)	14.75	0.000
⑤お母さんたちは赤ちゃんや小さい子を大切にしている	312	(96.6)	4	(1.2)	336	(98.0)	4	(1.2)	0.01	1.000
⑥お父さんたちは赤ちゃんや小さい子を大切にしている	310	(96.0)	7	(2.2)	333	(97.1)	7	(2.0)	0.02	0.895
⑦大人たちは子どもたちを大切にしている	307	(95.1)	13	(4.0)	335	(97.7)	4	(1.2)	5.44	0.025
⑧私は赤ちゃんや小さい子のことが好きだ	290	(89.8)	28	(8.7)	330	(96.2)	11	(3.2)	9.20	0.002
⑨みんなは赤ちゃんや小さい子のことが好きだ	296	(91.6)	24	(7.4)	329	(95.9)	11	(3.2)	5.97	0.015
⑩私は将来, 赤ちゃんがほしい	268	(83.0)	51	(15.8)	307	(89.5)	31	(9.0)	6.98	0.008
⑪赤ちゃんや小さい子を育てるのは楽しそうだ	255	(78.9)	66	(20.4)	295	(86.0)	44	(12.8)	6.82	0.009
⑫赤ちゃんや小さい子を育てるのはたいへんそうだ	304	(94.1)	17	(5.3)	316	(92.1)	22	(6.4)	0.44	0.510
【自分や友だちや家族の大切さに関する意識】										
⑬私は自分の家族のことが好きだ	309	(95.7)	11	(3.4)	322	(93.9)	15	(4.4)	0.44	0.505
⑭私は家族に大切にされていると思う	300	(92.9)	19	(5.9)	323	(94.2)	18	(5.2)	0.14	0.705
⑮私は友だちを大切に思う	313	(96.9)	5	(1.5)	333	(97.1)	5	(1.5)	0.01	0.923
⑯私は友だちに大切にされている	288	(89.2)	28	(8.7)	308	(89.8)	31	(9.0)	0.02	0.899
⑰いのちは, 大切なものだと思う	320	(99.1)	0	(0.0)	340	(99.1)	0	(0.0)		
⑱生きていることは, すばらしいと思う	315	(97.5)	4	(1.2)	339	(98.8)	1	(0.3)	2.01	0.203
⑲私を産んでくれたお父さん, お母さんありがたいと思う	317	(98.1)	2	(0.6)	337	(98.3)	2	(0.6)	0.00	1.000

*: χ^2 検定, ただし, 期待度数が5未満のセルがある場合には, Fisher の直接法を用いた。

表5 乳幼児とのふれ合い体験前後における否定的意識(そう思わない・全くそう思わない)の回答の変化(性別、学年、赤ちゃんと触れられた経験の有無による変化)

項目	学年*1	実施前 人数 (%)	実施後 人数 (%)	χ ² 値	p値*4	性別*2	実施前 人数 (%)	実施後 人数 (%)	χ ² 値	p値*4	赤ちゃんと触 れた経験*3	実施前 人数 (%)	実施後 人数 (%)	χ ² 値	p値*4	
【小さい子どもや育児に関する意識】 ①私は赤ちゃんや小さい子どもをかわいく思う ②私は赤ちゃんや小さい子どもは大切だ ③私は赤ちゃんや小さい子どもがこわい ④私は赤ちゃんや小さい子といっしょにいとくと楽しい ⑤お母さんたちは赤ちゃんや小さい子を大切にしている ⑥お父さんたちは赤ちゃんや小さい子を大切にしている ⑦大人たちは子どもたちを大切にしている ⑧私は赤ちゃんや小さい子のことが好きだ ⑨みんなは赤ちゃんや小さい子のことが好きだ ⑩私は将来、赤ちゃんがほしい ⑪赤ちゃんや小さい子を育てるのは楽しそうだ ⑫赤ちゃんや小さい子を育てるのはたいへんそうだ 【自分や友だちや家族の大切さに関する意識】 ⑬私は自分の家族のことが好きだ ⑭私は家族に大切にされていると思う ⑮私は友だちを大切に思う ⑯私は友だちに大切にされている ⑰いのちは、大切なものだと思う ⑱私を産んでくれたお父さん、お母さんありがたいと思う	5 年生	1 (1.1) 2 (2.2) 90 (97.8) 10 (10.9) 1 (1.1) 2 (2.2) 6 (6.7) 4 (4.4) 15 (16.9) 25 (27.2) 8 (8.7)	1 (0.9) 2 (1.8) 104 (93.7) 1 (0.9) 4 (3.5) 3 (2.7) 2 (1.8) 4 (3.5) 6 (5.4) 20 (17.5) 13 (11.5)	0.02 0.04 2.03 9.96 1.18 0.03 0.06 3.22 7.01 2.77 0.44	1.000 1.000 0.187 0.003 0.388 1.000 1.000 0.142 0.008 0.096 0.509		8 (5.1) 7 (4.5) 152 (96.8) 26 (16.5) 3 (1.9) 5 (3.2) 8 (5.1) 22 (14.3) 14 (8.9) 37 (24.0) 44 (28.0) 9 (5.7)	2 (1.2) 1 (0.6) 159 (95.2) 5 (3.0) 3 (1.8) 4 (2.4) 2 (1.2) 6 (3.6) 6 (3.6) 18 (10.8) 26 (15.5) 12 (7.2)	4.19 5.05 0.54 17.19 0.01 0.22 4.15 11.73 4.02 9.75 7.56 0.28	0.054 0.031 0.462 0.000 1.000 0.742 0.054 0.001 0.002 0.006 0.595		3 (1.1) 5 (1.9) 256 (97.7) 15 (5.7) 2 (0.8) 5 (1.9) 11 (4.2) 17 (6.6) 16 (6.2) 32 (12.3) 49 (18.7) 17 (6.5)	4 (1.4) 4 (1.5) 262 (95.6) 7 (2.5) 3 (1.1) 7 (2.5) 2 (0.7) 7 (2.5) 11 (4.0) 28 (10.2) 35 (12.7) 20 (7.3)	0.09 0.18 1.80 3.49 0.062 0.114 0.773 0.905 0.001 0.061 0.054 0.13	0.531 0.746 0.180 0.062 1.000 0.773 0.001 0.061 0.054 0.13	
	【小さい子どもや育児に関する意識】 ①私は赤ちゃんや小さい子どもをかわいく思う ②私は赤ちゃんや小さい子どもは大切だ ③私は赤ちゃんや小さい子どもがこわい ④私は赤ちゃんや小さい子といっしょにいとくと楽しい ⑤お母さんたちは赤ちゃんや小さい子を大切にしている ⑥お父さんたちは赤ちゃんや小さい子を大切にしている ⑦大人たちは子どもたちを大切にしている ⑧私は赤ちゃんや小さい子のことが好きだ ⑨みんなは赤ちゃんや小さい子のことが好きだ ⑩私は将来、赤ちゃんがほしい ⑪赤ちゃんや小さい子を育てるのは楽しそうだ ⑫赤ちゃんや小さい子を育てるのはたいへんそうだ 【自分や友だちや家族の大切さに関する意識】 ⑬私は自分の家族のことが好きだ ⑭私は家族に大切にされていると思う ⑮私は友だちを大切に思う ⑯私は友だちに大切にされている ⑰いのちは、大切なものだと思う ⑱私を産んでくれたお父さん、お母さんありがたいと思う	6 年生	7 (3.0) 8 (3.5) 223 (97.0) 20 (8.7) 3 (1.3) 5 (2.2) 11 (4.8) 22 (9.6) 20 (8.7) 36 (15.7) 41 (17.9) 9 (3.9)	4 (1.8) 3 (1.3) 220 (96.9) 7 (3.1) 0 (0.0) 4 (1.8) 2 (0.9) 9 (4.0) 7 (3.1) 25 (11.1) 24 (10.7) 9 (4.0)	0.79 2.31 0.00 6.41 0.248 0.11 6.21 5.79 6.53 2.07 4.85 0.00	0.375 0.129 0.980 0.011 0.248 0.746 0.021 0.016 0.011 0.150 0.028 0.970		0 (0.0) 3 (1.9) 160 (98.8) 4 (2.5) 1 (0.6) 2 (1.3) 5 (3.1) 5 (3.1) 10 (6.3) 14 (8.6) 21 (13.0) 8 (5.0)	3 (1.8) 4 (2.3) 165 (96.5) 3 (1.8) 1 (0.6) 3 (1.8) 2 (1.2) 5 (2.9) 5 (2.9) 13 (7.6) 18 (10.5) 10 (5.8)	2.87 0.09 1.84 0.21 0.00 0.14 1.53 0.01 2.15 0.13 0.51 0.12	0.248 1.000 0.285 0.716 1.000 1.000 0.270 0.923 0.143 0.716 0.477 0.724		5 (8.5) 4 (6.9) 55 (94.8) 15 (25.4) 2 (3.5) 2 (3.5) 1 (1.7) 11 (19.0) 7 (11.9) 18 (31.6) 17 (29.3) 0 (0.0)	1 (1.6) 1 (1.6) 62 (96.9) 1 (1.6) 1 (1.6) 0 (0.0) 2 (3.2) 4 (6.3) 0 (0.0) 3 (4.8) 9 (14.3) 2 (3.2)	3.16 2.20 0.33 15.19 0.601 0.220 0.26 4.56 8.05 14.91 4.04 1.87	0.104 0.190 0.668 0.000 0.220 1.000 0.051 0.005 0.000 0.044 0.044 0.497

*1 学年：5年生(実施前92名、実施後114名)、6年生(実施前231名、実施後229名)
*2 男女：男子(実施前158名、実施後170名)、女子(実施前162名、実施後173名)
*3 赤ちゃんと触れられた経験：ある(実施前262名、実施後279名)、ない・わからない(実施前59名、実施後64名)
*4 χ²検定、ただし、期待度数が5未満のセルがある場合は、Fisherの直接法を用いた。

検討した。否定的意識をもつ者が有意に減少している項目は、赤ちゃんと触れた経験がある者で、⑦大人たちは子どもたちを大切にしている、⑧私は赤ちゃんや小さい子のことが好きだ、であり、赤ちゃんと触れた経験がない・わからない者で、④私は赤ちゃんや小さい子といっしょにいると楽しい、⑨みんなは赤ちゃんや小さい子のことが好きだ、⑩私は将来、赤ちゃんがほしい、⑪赤ちゃんや小さい子を育てるのは楽しそうだ、であった。

IV. 考 察

本結果から、対象児童は本事業以外に赤ちゃんに触れた経験がある者が8割以上であった。弟・妹がいる者が5割程度であり、自身の幼いきょうだいと触れた経験がある者も多いと考えられる。先行研究では小学生で赤ちゃんを抱っこしたことが一度もないと回答した男児16.7%、女児8.3%であるとの報告もあり¹³⁾、本調査の対象児童が赤ちゃんと接した経験割合は、先行研究と比較して多くはなかった。

乳幼児とのふれ合い体験を楽しみにしていた児童が9割近くいたことは、事業前に実施された小学校における導入が、児童の事業参加への期待を動機づけていると考えられた。本事業を楽しみにしていた児童が多く、本事業が児童にとって普段の乳幼児とのふれ合いとは異なる特別な機会として期待されていると言える。

乳幼児とのふれ合い体験において、実際に児童が体験した内容は、いっしょに遊ぶ、握手する、話しかける、抱っこする、あやす、であった。乳幼児の母親に、話を聞くことができた児童もいた。あまり関わられなかったと感じている児童は5%以下であった。ほとんどの児童が、乳幼児やその母親とふれ合いをもっていたことは、本結果において、いのちの大切さに関する複数の項目が有意に肯定的意識に変化していた一要因と考えられる。一方で、少数であるものの、あまり関わられなかった児童がいる。その児童に対して乳幼児やその保護者とふれ合う経験がもてるように、事業スタッフが積極的にサポートすることが必要である。

【小さい子どもや育児などに関する意識】については、事業前調査においても、各項目（逆転項目以外）において、9割以上が肯定的意識をもつ者が多かった。一方で、否定的意識をもつ者も、数%から20%ほどいた。事業後には、子どもを育てるのが楽しそうではない、赤ちゃんがほしいと思わない、子どもといっしょ

にすることが楽しいことではない、赤ちゃんが好きではない、といった否定的意識をもつ者が有意に減少し、肯定的意識に変化していた。児童は、本事業を通じて小さい子どもと直接接することにより、小さい子どもをいとおしく思う気持ちや育児に関する意識が、肯定的に変化していると考えられた。乳幼児との直接的なふれ合いが、児童にとって、非常に有意義な経験であったといえる。

【自分や友だちや家族の大切さに関する意識】については、事業前後で児童の意識が否定的から肯定的に有意に変化した項目はなかった。本事業のねらいの一つに、児童がふれ合い体験の中で乳幼児を保育する親の姿を見て、自分自身も大事に育てられてきた存在であることや、親に関する感謝を感じてほしいことがあった。しかし、本結果ではこの効果は認められなかった。この要因として、もともと家族について否定的意識をもつ者が少なかったため、統計的有意差がみられにくかったと考える。また、児童が、乳幼児とその親の姿を見ることで、自身も家族に大事にされたと捉えることは、間接的な効果であり、変化が生じにくかったのであろう。

次に児童の性別による効果の違いを検討する。男子では、赤ちゃんや小さい子どもが大切である、いっしょにいると楽しい、みんなが小さい子どもや赤ちゃんが好き、自分も赤ちゃんや小さい子どもが好き、赤ちゃんがほしい、育てるのは楽しそうだ、といった意識をもつ者が事業後に多くなっていた。一方で、女子には変化がみられなかった。これは、事業前から、女子は男子よりも肯定的意識をもつ者の割合が多い傾向にあったため、事業への参加による大きな変化はみられなかったのであろう。一方で男子は女子よりも、事業前は否定的な意識をもつ者が多いが、事業を経験することにより肯定的な意識に変化していると考えられた。田中ら¹⁶⁾は、中学生男子による乳幼児とふれ合う前後の作文の文字数の変化を調査した結果、男子生徒が女子生徒よりも作文の文字数の増加率が高く、乳幼児とふれ合う体験が男子学生に大きなインパクトを与えていることを示している。寺村らの調査¹⁴⁾では、小学6年生において「赤ちゃんふれ合い体験学習」後の家族に対するイメージは、男子がポジティブに変化したのに対し、女子は変化がみられなかったという結果が示されている。このように先行研究でも、乳幼児とのふれ合い体験により、男子が女子よりも肯定的な変化を

示しており、本結果と同様の傾向がみられた。女子はふれ合い体験を行う前から小さい子に対する肯定的意識をもつ者が多いが、男子は、本事業で乳幼児と直接ふれ合う経験をする中で、小さい子どもやいのちについて肯定的意識をもつ者が増加している。ふれ合い体験の影響は、特に男子に大きいことが示唆された。

次に、学年別に見ると、5年生では、小さい子どもといっしょにいると楽しく、赤ちゃんがほしい、という意識に変化がみられた。6年生では、大人が子どもたちを大切にしている、みんな赤ちゃんや小さい子どもが好きだという意識にも変化がみられている。これは6年生は5年生に比べて、自己の意識のみならず周囲の者の赤ちゃんや小さい子どもへの意識を理解したために変化が生じていると考えられる。学年により異なる変化が生じていることがわかった。乳幼児とのふれ合い体験については、中学生から大学生において実施され、効果が検証されているが、対象とする年齢によりその目的や効果も異なるだろう。今後は、目的に応じて、ふれ合い体験を実施する年齢等を検討していくことも必要である。

児童が赤ちゃんにふれた経験の有無による事業前後の否定的認識の変化を見ると、赤ちゃんとうふれた経験がある者も、大人たちが赤ちゃんを大切にしている姿を見て、赤ちゃんや小さな子どもが大切な存在であることを感じる機会となっていた。赤ちゃんとうふれた経験がない・わからない者は、赤ちゃんといっしょにいると楽しい、赤ちゃんが好き、将来赤ちゃんがほしい、という肯定的な意識をもつ者が増加していた。小さい子どもや赤ちゃんとうふれ合った経験がない児童たちにとって、本事業により初めて乳幼児と意識的にふれ合う経験となり、乳幼児に対する愛着が生まれる機会ともなっていることが示唆された。

これまで述べたように、本結果では児童は乳幼児とのふれ合い体験により、否定的意識をもつ者が有意に減少した項目が多かった。逆転項目として設定した「赤ちゃんや小さい子がこわい」や、「赤ちゃんや小さい子どもを育てるのは大変そう」という項目については、ふれ合い体験前後とも、9割以上が「そう思う」と回答しており、ふれ合い体験前後において児童の意識の変化はみられなかった。育児には乳幼児が泣き止まず、困ったり、思いどおりにならない、など大変な側面もある。児童が乳幼児とうふれ合う中で、乳幼児が大切な存在であり、育児が楽しそうと感じると同時に、育児

の大きな部分も感じていたと考えられる。

V. 本調査の課題と展望

本研究では、いのちの大切さに関する19項目について、児童と乳幼児のふれ合い体験の効果を測定する尺度を開発することを研究目的の一つにしていた。しかしながら、対象となった児童の回答がポジティブな回答に偏っており、ほとんどの項目に天井効果がみられたことから、尺度開発には至らなかった。本研究で作成した尺度項目案が、一般的に好ましいと思われる小さな子どもに対する認識であるため、肯定的回答が多かったと考える。本研究結果を踏まえ、今後の当尺度を開発するためには、回答にばらつきが得られる項目を検討する必要がある。そのためには児童が乳幼児とのふれ合いによって生じる感情や認識にも着目するのがよいだろう。例えば、赤ちゃんや小さい子といっしょに遊びたいと思う、赤ちゃんや小さい子を守りたいと思う、といった内容である。今後、このような点を留意し、児童の乳幼児とのふれ合い体験の効果など測定可能な児童のいのちの大切さに関する認識を測定する尺度を開発していくことが課題である。

本研究の結果は、調査に協力していただいたA市B区内の小学校4校の状況を示したものである。この結果を、児童と乳幼児のふれ合い体験の一般的な効果であると確定するには、さらに多様な方法を実施している小学校のデータ数を増やしていくことが必要である。また、今回の調査は、児童の負担を考慮して、無記名で実施したため、事業前後の回答データは対応していないという限界があった。今後の改善策として、初回調査時に同一番号を記載した事前・事後の調査用紙2部を封入した封筒を配布し、事前調査用紙は回答後に回収、事後調査用紙は封筒に入れたまま封筒に児童の名前を記名し回収、さらに2回目調査時に事後調査用紙が入った記名がある封筒を児童に配布し、番号が記載された事後調査用紙に回答後に回収することにより、対応したデータ収集が可能となるだろう。

本研究におけるふれ合い体験による児童の変化は、事業を経験した直後の変化である。この変化が中長期的に持続するのかが検証することが、今後の課題である。中期的効果を検討する方策として、ふれ合い体験後3～6か月程度の児童の変化について、コントロール群を設定して、比較検討していくことが有用であるだろう。

VI. 結 論

本研究における乳幼児とのふれ合い体験の事業前後における児童の意識の変化をみたところ、【小さい子どもや育児に関する意識】12項目のうちの6項目について、否定的意識から肯定的意識へ有意に変化していた。短期的であるものの小さい子どもや育児に関する意識の変化がみられた。【自分や友だちや家族の大切さに関する意識】7項目については、事業前後で意識の変化がみられなかった。本結果から、児童と乳幼児のふれ合い体験は、児童にとって、小さい子どもが大切な存在であるという気持ちや育児に関する肯定的意識を高める機会となっていることが明らかになった。

さらに実施学年については、5年生、6年生ともに効果が得られている特徴がみられること、男子において否定的意識から肯定的意識に変化する項目が多いこと、赤ちゃんとのふれ合った経験がない児童たちにとって、乳幼児を育てることが肯定的意識に変化することが考えられた。これらについてはいずれも事業実施前後の短期的な変化であるため、今後は中長期的な変化を明らかにすることが必要である。

謝 辞

本研究にご協力いただきました児童の皆様、小学校の先生方、そしていのちの感動体験をこれまで丁寧に企画運営してこられた民生児童委員の方々や地域ボランティアの方々を中心に心より感謝を申し上げます。また、一緒に調査に取り組んでいただきました元 神戸市西区役所の高橋恭子保健師様を始めとします神戸市西区の保健師様方に感謝申し上げます。

本研究は、平成23年度神戸市看護大学共同研究費（一般）の助成を受けて実施した。また、本結果の一部は、第71回日本公衆衛生学会総会（山口）にて発表した。

利益相反に関する開示事項はありません。

文 献

- 1) 一般財団法人厚生労働統計協会. 国民衛生の動向62 (9). 2015/2016.
- 2) 原田正文. 母親について—まったく子どもを知らないまま親になる日本の母親たち. 子育ての変貌と次世代育成支援 兵庫レポートにみる子育て現場と子ども虐待予防. 名古屋市：名古屋大学出版会, 2007：38-161.
- 3) 清水凡性. 思春期体験学習の短期・長期効果. 望まない妊娠等の防止に関する研究 平成6年度厚生省心身障害研究報告書, 1994：286-289.
- 4) 須永 進. 思春期体験学習の評価に関する研究—関東地域の実施状況を中心に—. 望まない妊娠等の防止に関する研究 平成6年度厚生省心身障害研究報告書, 1994：283-285.
- 5) 宮崎 豊. 母子保健事業における思春期子育て体験学習に関する一考察. 千葉明德短期大学研究紀要 2003：24：29-38.
- 6) 宮谷真人, 大日向雅美, 田中義人, 他. 思春期体験学習の効果を評価する質問票の作成—多面的イメージ評価の試み—. 望まない妊娠等の防止に関する研究 平成6年度厚生省心身障害研究報告書, 1994：273-277.
- 7) 青木龍哉, 藤社恵美子, 西 弘美, 他. 和歌山県における思春期体験学習の効果に関する二つのアンケート結果の比較検討. 望まない妊娠等の防止に関する研究 平成6年度厚生省心身障害研究報告書, 1994：290-294.
- 8) 倉繁 迪, 猪野郁子. 育児に関する学生の意識調査—子どもとのふれあい体験が及ぼす影響について—. 小児保健研究 2001：60 (3)：447-453.
- 9) 佐々木綾子, 中井昭夫, 松木健一, 他. 母性を育てる学習プログラム開発のための基礎的研究 心理・生理・内分泌による乳幼児とのふれ合い体験の評価. 福井大学医学部研究雑誌 2005；6 (1-2)：27-39.
- 10) 佐藤洋美. 乳幼児とのふれ合い体験学習が中学生の子育てに対するイメージに与える影響. 日本生活体験学習学会誌 2004；4：35-54.
- 11) 小島康生, 水野里恵, 塚田みちる. 高校生を対象とした赤ちゃんとのふれ合い体験実習の効果 赤ちゃんイメージと子ども・子育て観における変化. 中京大学心理学研究科・心理学部紀要 2011；11 (1)：15-27.
- 12) 下中壽美, 井上松代, 玉城清子, 他. 「妊婦ふれ合い体験学習」が高校1年生女子のライフプラン, 妊娠・出産・育児の認識度に及ぼす影響. 思春期学 2009；27 (2)：194-203.
- 13) 片山美香, 清水凡生, 榎本美恵子, 他. 小学生を対象とした赤ちゃんとのふれ合い体験学習の試み. 思春期学 2003；21 (1)：113-125.
- 14) 寺村ゆかの, 川谷和子, 伊藤 篤. 地域連携にもとづく次世代育成プロジェクト「赤ちゃんふれ合い

体験学習」の短期的効果に関する研究. 保健の科学 2007 ; 49 (1) : 71-77.

- 15) 神戸市看護大学臨床共同研究班. 地域と大学が共同して展開する次世代育成支援事業の効果—小学生, 乳幼児の保護者および関係機関に与える影響の分析と地域ぐるみで行う子育て支援活動の在り方の検討. 神戸市看護大学臨床共同研究報告書, 2004.
- 16) 田中義人. 「赤ちゃんふれ合い体験学習」の中学生に与えたインパクト度の検討. 望まない妊娠等の防止に関する研究 平成6年度厚生省心身障害研究報告書, 1994 : 295-303.

[Summary]

Objective : The aim of this study was to clarify the anteroposterior change in the consciousness of schoolchildren who perform activities involving interchange with infants.

Methods : The study design was a before-and-after questionnaire survey of five-to six-year-old elementary

schoolchildren who experienced activities involving interchange with infants in A city from July 2011 to February 2012.

Results : Recovery rates were 99.7% before and 93.1% after the activities. The anteroposterior change in the consciousness of the schoolchildren significantly varied from negative to affirmative consciousness in 6 out of a total of 19 items.

Discussion : The results of this study suggest that activities involving interchange with infants increase affirmative consciousness in schoolchildren, and highlight the importance of schoolchildren being involved in the care of very young children.

[Key words]

activities involving interchange with infants, primary schoolchildren, project evaluation, development of the next generation